

Title	インド近代史への視角(1) : ラーラー・ラージパット・ラーイの活動に寄せて
Author(s)	桑島, 昭
Citation	大阪外国語大学学報. 37 p.49-p.72
Issue Date	1976-03-01
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80594">https://hdl.handle.net/11094/80594</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# インド近代史への視角 (1)

—ラーラー・ラージパット・ラーイの活動に寄せて—

桑 島 昭

## A Study on Modern Indian History (I)

—with special reference to the thought and  
activities of Lala Lajpat Rai—

Sho KUWAJIMA

This study seeks to trace the political and social ideas, and international outlook of Lala Lajpat Rai, whose activities cover such a long period from 1880's to 1920's. The aim of the work is to try to grasp the stream of Modern Indian History in a consistent perspective, and also to discuss the meaning of the First World War in the History of Indo-Japanese Relations or more broadly of Modern Asia.

In the preparation of the third chapter I made use of Japanese sources (diplomatic papers, newspapers and a biography) in order to understand Komagata-maru affairs, mutiny at Singapore, 'extradition warrant' to two revolutionaries, and visit of Rai to Japan in 1915.

### CONTENTS

1. The thought of 'social reform'
  - (1) Two parties in Arya Samaj
  - (2) Arya Samaj and nationalism
2. Nationalism of 'extremist' section
  - (1) Before and after the Surat session of the Congress
  - (2) Kisan movement in Punjab (1907)
3. International outlook of Rai
  - (1) Ghadar Party movement
  - (2) Rai and the History of Indo-Japanese Relations
  - (3) Rai on national self-determination
4. 1920's in Indian History (to be continued)

## まえがき

1880年代から1920年代にかけてインドの政治指導者であり「社会改革者」としても活躍し、「パンジャブの獅子」と称せられたラーラー・ラージパット・ラーイ（1865—1928）は、日本ではブルジョア・デモクラットないしブルジョア民族主義者<sup>(1)</sup>として理解されている。そして、彼にたいする批判もしばしばブルジョア民族主義者としての「限界」に向けられているが、インド国民会議派の指導者でありながらラーイほど長期にわたり様々の論争の渦中であって多くの論敵の批判を浴びつつ活動を続けた人物もめずらしい。それは、50年近い活動のあいだ、ラーイが極めて卒直に自分の考えや心情をとときには雄弁にとときには失意あるいは怒りを抑えきれずに表明してきたからでもあった。

とくに、1928年の悲劇的な死をのぞくラーイの1920年代の政治活動についての評価は一般的にきびしい。大著『インド国民会議派の歴史』のなかで、シタラマイヤーはラーイが闘士ではあったが、ガンディーにしたがったサティヤーグラヒー（真理の把持者）ではなく、第一次世界大戦直後「水を離れた魚」になったと評している。また、1920年代、ヒンドゥーの政治組織ヒンドゥー・マハーサバーの活動に投じた事実によって、ラーイにヒンドゥー・コミュニストのレッテルが貼られることもある。これらはともにラーイの思想の一面を言いあてている。

にも拘わらず、ラーイの長期にわたる活動、民族の自治、独立への強烈な関心はいうまでもなく、その基底にある豊かな国際的認識、イギリスのインド経済支配、とくに「富の流出」にたいする執拗な論及、インドにおいて独特の意味をになってきた「社会改革」<sup>(4)</sup>や「民族教育」についての発言と実践、労働者・農民問題への接近等々多岐にわたる活動を歴史的にあとづける試みは意外に乏しい。ここでは、インド近代史のそれぞれの時期の背負っている課題につねにかかわり続けてきたラーイの生涯をふりかえりながら、インド史における19世紀後半から1930年代への架橋を試みてみたい。

## 第1章 「社会改革」の思想

### 一. アーリヤ・サマージの二つの流れ

イギリス植民地支配の確立する19世紀インドは、これに対応する都市中間層の政治的自覚や「社会改革」運動にとどまらず、インド全土におよぶ農民反乱や農民に働きかけた「社会改革」このいずれの範疇にも入れがたい反英武装結社など多様な変革への動きに包まれており、それらは反撥しあう面をもちながらも、相互に規定しつつインド近代の抵抗思想を形成していった。

1875年に、スワミー・ダヤーナンダ・サラスワティーによってボンベイで創立され、1877年にパンジャブ州ラーホールで組織を整えた「社会改革」運動の結社、アーリヤ・サマージ（協会）は、その創立期には当時のエリートであるカルカッタ大学の卒業生や法律家、官僚、医師などいわゆる都市中間層に支えられながら、<sup>(1)</sup>やがて20世紀初頭から1910年代にかけて戦闘的な民族主義者の群像をうみだした。それは、「ヴェーダに帰れ」に集約される単なる「復古主義」思想の故に

ではなく 参加者達の同時代の現実への鋭い関心がアーリヤ・サマージの教義を自己に引寄せてこれに生命をあたえたからである。

もともと、アーリヤ・サマージのメンバーになるための10の原則には、あらゆる知識の根本因としての神、全真全知の神のみへの崇拜（＝偶像崇拜の否定）、真の知識の書としてのヴェーダ（＝ヴェーダの宗教の復活）の承認が定められ、これらが近代の腐敗したヒンドゥー社会と細分化・固定化されたカースト制度を改革する思想的拠り所となっていた。ラーイに約一世代おくれでアーリヤ・サマージの活動に参加し、不可触民のための夜学校で教えたことのある作家ヤシュパールは、ヴェーダ・ダルマの復活の呼びかけが不合理な因襲、悪弊、誤まった信仰からの解放を意味し、教育の普及、未亡人の再婚の奨励、不可触民の人権の要求のためにつくしたアーリヤ・サマージの活動がコミューナルな枠のなかで進歩的・革命的でさえあったとして、この進歩的精神の当然の結果、植民地支配への不満と政治的自覚もうまれたと論じている。<sup>(2)</sup>

同時に、アーリヤ・サマージの原則の一つは、「わが民族の一般的社会福祉にかんする事柄においては個人による一般の利益への介入を許すべきではないが厳密に個人的な問題ではすべての者が自由に行動できる」という規定をわざわざ挿入して、社会的利益を妨げない限りでの個人生活への不介入を謳い、都市中間層の要求に応ずる側面をのぞかせていた。ラーイによれば、初期のアーリヤ・サマージ参加者のうちわずかの者がサンスクリットについての生かじりの知識をもっていたにすぎない。おなじ「社会改革」運動の結社であるブラーフマ・サマージを経て1882年にアーリヤ・サマージに入ったラーイは、1886年から92年にかけてヒサル支部の活動に加わった。彼にしてもときに年収1万7千ルピーに及ぶこともある弁護士業の疲れでサンスクリットの勉強には身が入らなかったと述懐している。<sup>(3)</sup> 都市中間層としての職業的忙しさはヴェーダの言葉を学ぶ余裕を奪っていたのである。

それでは、ラーイにとって「ヴェーダの宗教の復活」とは何を意味したか。アーリヤ・サマージは業（カルマ）や輪廻の思想を否定はしなかったが、カルマを現世における正しい行ないによって克服しうるとして、生まれながらにカーストが一生定まってしまう運命論的な現在のヒンドゥー社会の観念を打破し、「ヴェーダの時代」のあるべき姿に戻そうとした。こうして、古き時代への誇りは民族的自信を呼びましたが、「社会改革」にたいする積極的姿勢は経済的自由への欲求によって育くまれてもいた。ラーイが宗教的にはジェイン、カーストのうえではアガルワル（商業カースト）という家族的環境に育ったこともアーリヤ・サマージの思想を受け入れやすかったといえる。それにも増して、ラーイはパンジャブの新興ブルジョアジーとその知識人を代表していた。彼は、アーリヤ・サマージの指導者も加わって1894年に創立されたパンジャブ・ナショナル銀行の取締役の座に就き、綿工業の会社を共同所有していたほか、いくつかの会社の株をもっていた。古きインドへの誇りが青年ラーイをアーリヤ・サマージに引き入れたが、弁護士兼企業家としての比較的自由な精神こそが「ヴェーダの時代」に託して現世的な「改革」への欲求を表現させたともいえる。

1890年代になると、アーリヤ・サマージの内部では、ダヤーナンダの教えを厳格に守ろうとする「マハートマー派」と、協会の10の原則にのみ拘束力を認める「教養派」とのあいだに分裂がおこった。対立の直接的契機の一つは、肉食を否定したダヤーナンダの発言に意義を認めるか否かにあり、他のより重要な論争点は、始祖の死を悼んで創立されたダヤーナンダ・アングロ・ヴェーディック・カレッジ (DAVカレッジ)の教育方針を官立大学 (パンジャブ大学) 加入による窮屈なカリキュラムから解放し、ヴェーダのサンスクリットを重んじ、ダヤーナンダの教育・研究計画に沿ってすすめるべきではないかということにあった。<sup>(4)</sup> カレッジが「教養派」の手中にあるなかで、「マハートマー派」が1902年にカングリーに自己の学校 (グルクル) を設立するに及んで分裂は決定的となる。

「教養派」にダヤーナンダの教えからも自由であろうとする空気の存在したことは特筆に値する。アーリヤ・サマージについては一般に「復古主義」の特徴が指摘されるにも拘わらず、「教養派」のなかには、「近代的観念」の雰囲気の中で「ゆるやかな規律」に従い、「寺院というよりも中庭と庭園とがあって講堂のような感じのするマンディル (寺)」に出かけて「簡素で美しい儀式」を楽しむ新興官僚の家族もあった。<sup>(5)</sup> 彼らも現実のヒンドゥー社会を息苦しく感ずる限りではアーリヤ・サマージの批判精神を共有していたが、ヒンドゥー社会への内在的批判の姿勢、それを媒介にした民族的抵抗への自覚は稀薄であった。

アーリヤ・サマージの分裂にたいするラーイの態度は、彼の思想を特徴的に示している。彼は指導者達に寛容さがあれば分裂を回避することができたと考え、当初両派の再統一への努力を試みている。やがて、ラーイは「カレッジ派」に属してラーホール支部の総裁やカレッジの運営、学報の編集長の仕事にあたった。後年、彼はカレッジには親の愛情、グルクルには恋人の愛情を抱いているとのべ、いずれとも意見の相違のあったことを卒直に披瀝している。<sup>(6)</sup> また、「民族教育」の視点からはグルクルの訓練と生活がカレッジよりもヒンドゥーの理想に合致しているとすらのべている。<sup>(7)</sup>

このように自己の属する「派」を相対化しうる思想の幅はラーイの生涯にわたっているが、それは歴史的課題にあくまで具体的な解決を求める彼独特の姿勢に由来している。ダヤーナンダの教えと解釈を無謬と信じこみ、これを忠実に行なうにはあまりにも現実<sup>・</sup>に近かったラーイは、他方では「茫漠たるヒンドゥーイズム」のなかではダヤーナンダという方向指針者を必要とするという現実<sup>・</sup>的発想を採っていた。しかし、彼の現実<sup>・</sup>的発想はしばしば現実によって裏切られ、そのたびに心に打撃をうけていることから、ラーイの思想の幅は、単に彼の老獪さの反映というよりも、自己のこれまでの視角を保ちつつ、しかも新しい状況には新たな視角を用意することを躊躇しない進取性にあり、それらはしばしば相互に矛盾しながらもラーイを支えていたのである。

## 二. アーリヤ・サマージとナショナリズム

ラーイがインド国民会議派の大会にはじめて出席したのは1888年のアラーハーバード大会であ

る。のちに、彼は会議派の創設に重要な役割を演じたイギリス人退役官吏A. O. ヒュームの成立期における「自由」への情熱を評価している。もっとも、ラーイはヒュームが支配者の承認をえて政治組織を発足させた「異常性」と大衆の不満をそらす「安全弁」という彼の考えには批判的であった。<sup>(8)</sup> それとともに、ラーイは、すでに1880年代のはじめに、のちの会議派「穏健派」の指導者スレンドラナート・パネルジーのマツティーニ論に感動し、以来マツティーニを「私のグル(師)」と仰ぐようになっていた。ヒサールにおける弁護士生活のあいだにマツティーニの伝記を取寄せたラーイは、彼の「深いナショナリズム、苦難、優れた道徳性、広い人道的思いやり」に心を打たれ、マツティーニの『人間の義務』をウルドゥー語に訳した。このときは訳稿を見せられた友人が自分の名で出版してしまうという駄足がついたが、あらためて1896年に、ラーイ自身マツティーニとガリバルディーの伝記をウルドゥー語でまとめている。

マツティーニの「ナショナリズム」の情熱的評価とヒュームの「リベラリズム」への現実的対応の同居にもラーイの思想の特色があらわれているといえよう。

ところで、ラーイによれば、当時アーリヤ・サマージのメンバーは、概して、イギリス人の産物である会議派がインドに自由を与えるとは考えず、ヒンドゥーとムスリムの統一よりも分裂しているヒンドゥーの連帯を優先させていた。さらに、政府がアーリヤ・サマージを疑いの眼で見、また逆にサマージ自身多くの官僚をかかえていたことも、この結社の政治不参加の一因となったと説明している。<sup>(9)</sup> ラーイはヒンドゥー連帯論者とも官僚メンバーとも意見を異にしたが、それでも1893年の会議派ラーホール大会以後1899年まで当時の会議派の中心的活動ともいえる大会に出席していない。「パンジャブ・インテリゲンチヤの最良部分がアーリヤ・サマージに」<sup>(10)</sup> ありながら政治活動がこの時期にあまりみられなかった原因には、上記の事情のほか、アーリヤ・サマージの分裂抗争に加えて、インド軍兵士の供給地としてイギリスのインド支配を支える柱としての役割を果たしてきたパンジャブの歴史的立場も関係しているであろう。

こうした状況に抗して、ラーイは1904年に十年來の知己であるティラクのすすめた人物を編集長に据え、政治活動復活の目的で『パンジャービー』紙を発刊した。そして、この新聞にたいする弾圧こそパンジャブの政治情勢を急転させる発端となった。

しかし、ラーイは1907年をアーリヤ・サマージの歴史の最大の危機の年、そしてこの危機が1910年まで続いたとみている。<sup>(11)</sup> ベンガル分割(1905)以後の民族運動の昂揚のなかでこの結社にも新たな息吹きが台頭し、ヒンドゥーとしての社会的自覚を媒介として民族的意識を鍛える新しい世代、より広汎な社会階層出身の青年層の渴望は、19世紀都市中間層の「社会改革」運動の枠組をはみだしはじめていた。政府は、アーリヤ・サマージの煽動的役割は確実であるとして弾圧体制を敷いたが、アーリヤ・サマージの指導者達は彼らの組織が政治団体ではないと防戦に努めた。政府の弾圧を見越してつくった歴史教科書を楯に口頭では民族意識を培っていたというグルクルの場合でも、政府高官をときに招いて歓迎のポーズをとり、学生もこれを止むをえないと認めていたといわれる。<sup>(12)</sup>

かくして 北西インドを中心とするとはいえ、全国 州、支部を連ねるピラミッド型体制、週一回の集会による規律の維持、メンバーの収入の10の1を納入させる財政に基づいた「完全な組織」<sup>(13)</sup>は、政府の直接的弾圧を辛うじて免れ、飢饉の救済、不可触民への援助、学校網の拡大と活動の裾野をひろげていった。1911年の国勢調査によると、アーリヤ・サマージのメンバーは約24万人である。

ひとたび根を張った民族意識は容易には取り去りがたい。しかし、政府との摩擦を通じて組織としてのアーリヤ・サマージには微妙な変化が徐々にうまれはじめた。ヤシュパールは、初期の「進歩的精神」を高く掲げたアーリヤ・サマージも次第に自己の目標よりも自己の機関の維持に重きを置き、外国支配者の怒りから逃れるために反英思想よりもコミュニナリズムの色調を帯びはじめたと指摘している。<sup>(14)</sup>

1914年に『アーリヤ・サマージ』を著わしたラーイは、そのなかでヒンドゥーイズムとその社会に盡すべきアーリヤ・サマージがヒンドゥーイズムの大海のなかで自己を見失ってはならないとして無制限の拡張に警告を発し、今日のインドが排他的にヒンドゥーに属するものでなく、ヒンドゥーの繁栄と将来がより大きなイズム、インド・ナショナリズムとの調和にかかっていると説いている。<sup>(15)</sup>この発言は、1920年代のヒンドゥー・ムスリム間の暴動にかかわるアーリヤ・サマージにたいする貴重な警鐘となっている。が反面で、「ヴェーダ・ダルマの復活」をインド独立の思想に結合させた青年層の民族的要求に重なりつつも、これに一定の距離を置いていることは否めない。

しかし、舞台の正面における「政治団体」論争の背後では民族的自覚の思想の継承がおこなわれていた。アーリヤ・サマージの熱烈なメンバーであったと自ら称し、1925年の「カーコーリー隠謀事件」で死刑となった革命家ビスミルに、宗教的・政治的助言を行ない、マツツイーニの生地を訪ねるように勧めたのは、のちにふれるラーイの流刑に抗議したアーリヤ・サマージ指導者であった。<sup>(16)</sup>また、アーリヤ・サマージから佛教を経て1930年代にマルクス主義に到達したラーフル・サークリットヤーヤナに、ベンガル分割以後のインド独立運動の苦闘を淡々と語ったのもアーリヤ・サマージ系の学校のティラクを信奉するアラビア語教師である。ラーフルが「アーチャーリヤ（ヴェーダの教師）のきわめて狭量な、そして隠遁者の相対的には寛容であってもやはり狭量な雰囲気から抜け出て、アーリヤ・サマージに入り、思想の自由の価値を知りはじめ」、ラーホールの DAV カレッジの歴史教師ハーイー・パルマーナンドが書いた発禁の書『インド史』<sup>(17)</sup>にひそかに感銘したのは1910年代のことである。まもなく、ラーフルはアーリヤ・サマージの理想とロシア革命の思想との「調和」の探求へと進むのである。

## 第2章 「過激派」のナショナリズム

### 一、会議派スーラト大会の前後

1905年、カーゾン総督による一方的なベンガル分割の実施の頃を境として、イギリスへの請願

方法にもはや期待せずスワラージ（自治）の問題を大衆行動に訴える民族主義派、いわゆる「過激派」が会議派内に登場した。ラーイもその一人とみなされているが、「穏健派」との協調をも求めている点で独自の道を歩んでいる。

1905年の会議派ベナーレス大会におけるラーイの演説は民族主義派の基礎を据えたものとみずから語っている。しかし、彼がその演説で「我々はイギリス統治の大いなる讃美者である。この統治によって利益をえた者としてイギリス統治の最良の伝統をふみにじらないよう」にイギリスに訴えたとき<sup>(1)</sup>、それはむしろ「穏健派」にふさわしい発想であった。ラーイは「穏健派」の指導者ゴーカレーに尊敬の念を抱き、「穏健派」には勇気を、「過激派」には熱狂に押流されて運動の芽をつまないことを要請している。1905年の大会ではプリンス・オブ・ウェールズ（のちのジョージ五世）の訪印歓迎決議の際にゴーカレーの説得を受入れ、みずから会場外に出ることでその場を収め、翌年のカルカッタ大会では、「穏健派」批判の沸騰した雰囲気の中でラーイは両者の相違を言葉のうえだけのものと受けとめ、スワデーシー（国産品愛用）に関する修正案を提出し、ビピン・チャンドラ・パールをふくむ「過激派」指導者の賛成をえられぬままに多数でこれを通過させた。

1907年のスーラト大会では、ラーイは「過激派」の推薦で議長に立候補することを断わり、また彼らだけの大会開催にも賛成していない。しかし、両者の和解を期待しただけに「過激派」追放の形における会議派の分裂はラーイの心痛をつのらせた。その後もラーイは会議派にとどまりはしたが、「過激派」を政府の弾圧にさらさないように訴え続けたのである。しかし、「穏健派」のあまりに対英協力的な姿勢、とくにムスリムのための分離選挙制度を認めたことには失望を禁じえなかった。こうして、1912年の大会で南アフリカのインド人にたいする人種差別問題にかんしてウルドゥー語で議場を圧する演説を行なったこと<sup>(2)</sup>を除けば彼の会議派にたいする興味は急速に削がれていった。「穏健派」に近い道を歩んだラーイも「穏健派」批判の視点は崩れていなかったのである。

ラーイが「穏健派」と区別されるもう一つの点は、彼の政治活動も社会活動も大衆の存在を前提とし、彼らに働きかけたことであろう。1908年以後、ラーイは弁護士業の再開やラーホール市行政への参加のほかはヒンドゥーの子供達の教育や不可触民への援助に力を注いだ。<sup>(3)</sup>

アーリヤ・サマージの活動の一環としてシュッディー（純化）運動があることはよく知られている。これはヒンドゥー社会を去った人々を再びヒンドゥーに改宗させることを目的としている。1920年代にはこの運動の鋒先はムスリムに向けられ、コミュニアル暴動において重要な役割を演じた。しかし、1910年前後のラーイはシュッディー運動の重点を「不可触民を可触民の列に引上げ、彼らを高い社会的理想に向けて教育し、最終的には他のヒンドゥーとのあいだに社会的平等をもたらす<sup>(4)</sup>」ことに置いている。この頃の活動の一端をラーイは次のように語っている。

「ヒンドゥー正統派の本拠、UP州では活動は一層むずかしい。しかし、昨年私は多くのドーム（不可触民カースト）を教化してアーリヤ・サマージにいれることによって正統派の要塞に大き



な穴をあけることに成功した。私は丘陵奥深く彼らの家に出かけ、多くの高カーストのアーリヤ・サマージのメンバーと共に彼らの料理した食物を食べ、彼らのもってくる水を飲んだ。昨年私はベナーレスに行き、ヒンドゥー正統派のまさに中心地でこの問題について大集会で演説し、パンディット（学者）達に私及び私と一諸に活動している者をカーストから追放するよう挑戦した。<sup>(5)</sup>」

ラーイの不可触民問題への関心は、第一次世界大戦期に彼が生活するアメリカの黒人社会への関心に連なっていくようになみなみならぬものがあり、彼が自己を復古主義者ではなく改革者とよんだことにはそれなりの理由があった。おなじく「社会改革」運動を経て「過激派」の先頭に立ち、「社会改革」に先がけて——否定したわけではない——政治変革の課題を優先させるにいたったティラクと異なり、ラーイの特徴は、「社会改革」運動にかんしては19世紀の運動の枠組を変えることなく、しかし大衆と接触する地点までそれを拡げることにあった。「政治団体」論争におけるラーイの立場もこの点にかかわってこよう。したがって、ラーイは20世紀最初の10年間に於いて帝国主義批判の政治家としてのティラクにみられる明快さと鋭さとを印象づけてはいないが「社会改革」者としての経験を通しやがて世界の民族・人種・身分の差別をも視野におさめる広さを備えていた。

## 二. パンジャープの農民運動

1907年前半、パンジャープにはかつてなく反英の嵐が吹き荒れた。これには全国的な運動の昂揚とパンジャープ独自の条件とが結びついていた。情勢激化の発端は、1906年4月、『パンジャープビー』紙が、官吏の荷物運びに雇われた二人のインド人の死とヨーロッパ人官吏によるインド人の「偶発的」射殺という、ともにラーワルピンディーで起った事件を取上げたかどで編集長らに逮捕状がだされたことにある。<sup>(6)</sup>

このほか、ラーワルピンディー地区の地税およびバリ・ドアーブ灌漑路の水利料の引上げも農民の不満をかったが、最大の争点は開拓地法案であった。パンジャープ州知事の説明では所有地の一様性と開拓地のよりよい管理をめざすものとされたが、土地の細分化を防ぐためという長子相続制の規定や、<sup>(7)</sup>特定数の木を育てさせ、計画にしたがって家屋を建てることまでも義務づけたことは、<sup>(8)</sup>開拓者達の土地所有権への重大な侵害として映った。とくに、シク・ジャートを主とし大部分元軍人を開拓者とするラーヤルプル地区チェナープ開拓地の場合、彼らがパンジャープ各地、とくに中央パンジャープの諸地区から集まっているため、出身地への農民の不満の飛び火と軍隊内部へのその浸透が、イギリスによって極度に怖れられた。実際、ラーホールの DAV カレッジに学んだ、「過激派」の一人アジート・シンはラーヤルプルの開拓地農民のあいだでも活動していたのである。

1907年5月1日、アジート・シンの演説した集会を主宰した理由でラーワルピンディーの裁判所に5人の弁護士が出頭を命ぜられた。ラーイも様子を見守るためにかけつけたが、その日裁判所の周辺には2万人以上といわれる群衆が集まった。学生のほか、ストライキに入った兵器廠、

鉄道工場の労働者、アジート・シンの呼びかけで農村からやってきたシク・ジャートの農民、農業労働者も参加していた。<sup>(9)</sup>しかし、予定された裁判所での事情説明は延期を申渡され、憤るデモの列は地区長官のバンガローに押入るなど暴動と化し、軍隊の出動でその場の事態はようやく鎮められた。

この時期、ラーイは大衆集会でスワデーシーやボイコット運動について訴え、『パンジャービー』紙では開拓地法案や土地譲渡（修正）法案への反対を表明したが、集会・デモにおける彼の役割は、集会の採択する決議の調子を和らげ、興奮した群衆をしづめることに向けられ、ラーワルピンディー事件の現場でもラーイは集会での演説とデモへの参加を求められながらも断っている。ラーイは、シク・ジャート農民の出身でアーリヤ・サマージの活動家であるキシヤン・シン（1920年代の革命家バガット・シンの父親）にたいする信頼は厚かったが、彼と兄弟であるアジート・シンの人柄には疑問をもち、その協力の求めにも応ぜず、二人の関係はおなじ「過激派」に属しながらもしっくりしなかった。しかしながら、事件を秘密警察の仕業とみるラーイが、逮捕の数時間前に『パンジャービー』紙のために書いた文章は、無法状態を戒めながらも、アジート・シンらが大衆の不満を支持することによって彼らの共感を獲得し、世論のかかなりの部分を代表していることを認めている。<sup>(10)</sup>ここにも論敵をみつめるラーイらしい幅がある。

このような認識に立ってはいしたが、ラーイは民族の独立と農民問題の結合、広汎な都市と農村の大衆の結集のための指導を斥けた。ソ連のインド研究者レイスネルは、こうした時期における大衆行動の自発的未組織的特徴の一因を指導層の性格、ないし指導層の欠如に求めている。<sup>(11)</sup>ラーイは、大衆が若い衝動的な指導者達を堅実で恒久的な成果をもたらす方向にその影響力を行使したとのべているが、<sup>(12)</sup>現実には大衆は指導者なしに当面の課題に沿って行動せざるをえなかったのである。

ラーワルピンディー事件後まもなくラーイは逮捕され、1907年11月までビルマのマンガレーで流刑生活を送った。逮捕理由は「英帝国内での暴動を防ぐ」ためという以外明らかにされなかった。パンジャープ情勢の深刻化の真因を農業問題と考え、これを政府レベルで解決しようと理解するラーイにとっては民族的英雄としてより失意の入獄であったといえる。結局、ラーイの流刑中に開拓地法案は取下げられ、事態も表面的には落着きを取戻して、ラーイは釈放された。この間、イギリス本国のインド相モーレーも、総督ミントーも、おなじく流刑となったアジート・シンよりは「好意的」な評価と待遇をラーイに与えたのである。

1914年の時点でインド社会の「階級分析」を試みたラーイは、農民の99%が政治に無関心であるとのべている。<sup>(13)</sup>農村はラーイにとって「社会改革」のために働きかける対象とはなっていたが農民自身が民族解放への模索をはじめているという認識は1907年の歴史的経験にもかかわらず芽生えてはいなかった。インドの民族的指導者の側でスワラージと「社会改革」と農民問題を一つの焦点に結ぶには、第一次世界大戦という画期を待たねばならなかった。

### 第3章 ラーイの国際的認識

#### 一．第一次世界大戦期の革命運動

1914年にラーイは会議派代表団の一員として訪英したが、まもなく第一次世界大戦が勃発し、インド内の活動についての懸念から1919年まで主としてアメリカにおいてインドからの自費送金で生活した。<sup>(1)</sup> この間、1915年に5ヶ月程日本を訪れている。ラーイはアメリカ在住の多くのインド人革命家達と接触しながらもその運動には加わらず、1917年にはニューヨークで在アメリカ・インド自治連盟を結成し、その機関紙『ヤング・インディア』の編集をおこなったほか、1919年にはインド情報局を設置して民族主義者としての啓蒙宣伝活動にあたっている。彼の主要著作の多くは、このアメリカ滞在中に書かれた。

ところで、大戦期におけるもっとも注目すべきインド人の革命運動は、カナダ、アメリカに移住した主としてパンジャービー、とくにシク教徒をメンバーとして1913年にアストリアで結成された太平洋岸インド協会、一般的にはその機関紙の名によってガダル（反乱）党として知られる組織の運動である。彼らのほとんどは、もともとパンジャープの土地所有農民＝「中農」<sup>(2)</sup>の出身であり、パンジャープ農業の「繁栄」と土地にたいする人口の圧力の増大するなかで、19世紀90年代以降職を求め、しばしば自分の土地を売るか抵当に入れてアメリカ大陸に渡った。新移民法による大幅規制以前の1908年にはカナダのコロンビア州で5千人以上が鉄道建設、森林、鉱山に働き、一方、1910年にはカリフォルニアを中心とするアメリカではカナダを逃れた者をふくめ約6千人が農園や森林で働いている。<sup>(4)</sup> 途中、中国から東南アジアにかけて警察官あるいは兵士としてイギリス植民地支配の維持にあたる経験をもったのちにアメリカ大陸に移った者も多い。このように元来は「イギリスに忠実で」「富裕な」シク農民をインド独立のための武装革命に駆りたてたのは、人種差別の体験と移民規制であった。ことに、カナダの規制に際しては、代表団のカナダ政府、イギリス政府への請願にたいする冷淡な解答、とくに「本国」インド政府すら彼らを擁護する側にないという痛切な体験があり、このような体験を媒介として独立インドのみが真に彼らを守りうるとする結論が導かれたのである。バンクーヴァーのシク寺院（グルドワラ）での集会では、請願のときは去り武器を取るときが来たという呼びかけがなされ始めた。

やがて、運動の中心はアメリカ太平洋岸に移り、ハルダヤール（ヒンドゥー）を書記長兼機関紙の編集長に迎えてガダル党を基軸とする活動がはじまった。ハルダヤールは、かつてラーイのマツイーニ伝に感動し、オックスフォード留学中はラーイとアジート・シンの逮捕に衝撃を受け、1908年に政府奨学金を放棄して帰国し、ラーホールにアーシュラムを開いている。その学生達はラーイと足しげく接触したが、ハルダヤール自身はスーラト大会のとき「穏健派」と行動を共にしたラーイに失望し、また、アーリヤ・サマージに入って活動するようにとのラーイの勧めも断っている。宗教を政治活動の前提としないというハルダヤールの発想はガダル党の信条となるが、ガダル党が「世俗的」視点を強調したことは注目されてよい。もちろん、ガダル党の指導層の意識にも問題はあった。ハルダヤールは、我々と合流して自分の家をたてたくない者は西ア

ジアに去れ、インド独立はヒンドゥーだけで獲得できるというムスリム社会にたいする不信感をもって露わにしている。<sup>(5)</sup>「世俗主義」の発揚がムスリム独自の民族的自覚への道を切捨てかねないというインド近代史の一側面がここにみられよう。また、ガダル党の研究者クシュワン・シンらによれば、英語に堪能なヒンドゥーまたはムスリムの指導層と文字もあまり読めないシクのそれとのあいだには、法律家と「粗野な」依頼人、バーブー（旦那）と大衆との関係に比すべきものがあつたといわれる。<sup>(6)</sup>しかし、シクを主たるメンバーとするガダル党の働きかけによってシンガポールで反乱を起したのはインド人ムスリム兵士であつた。

また、ガダル党の結成に際して、「世界のいづこであれ、隷属に反対する戦争のあるところでは自由・平等の支持者達を全力で支援する」という国際的連帯の理想が掲げられた。このような形で表現された思想は、19世紀後半以降のインドの民族主義者達の国際的関心の深さ、そして欧米在住のインド人革命家達とアイルランド、ロシアなどのヨーロッパその他の革命家達との交流のなかで育てられたものであろう。しかし、世界戦争の危機がインド人革命家達に新しい要素、つまり、帝国主義戦争の到来といふ状況のもとでの国際的条件の利用を考慮の対象とさせはじめたことも事実である。ガダル党の指導者達は、大戦前から英独戦を予測してイギリスの敵ドイツの同情・援助を期待し、実際にその後サンフランシスコのドイツ領事館と接触し、ドイツの援助によるトルコ軍のスエズ運河封鎖を機としてのインドの反乱を計画したり、あるいは党員の軍事訓練をドイツに依頼したりしている。<sup>(7)</sup>

と同時に、ガダル党の初期の運動がアメリカ大陸に働くインド人労働者の労働によって支えられていたことも確認しておく必要があろう。インドに帰って独立のための武装反乱をという昂揚した雰囲気は到底ドイツ政府の主導する計画でうみだせるものではなかった。

1914年5月、ガダル党の指導者ハルダヤールは逮捕され、党首脳部は保釈後の彼をヨーロッパに脱出させた。その後、ハルダヤールはベルリンでインド独立委員会に参加したが、ガダル党との直接的関係は途絶えている。

ハルダヤールが去つてのち、ガダル党の指導は、総裁ソーハン・シン・バクナー（のちの全インド農民組合理長）にかかってくる。パンジャブのアムリットサル地区の「富農」出身の彼は、父から65エーカーの土地を相続したが、青年期の10年間を放蕩にすごし32エーカーの土地を抵当に入れるほどであつた。その後、シクの改革運動でイギリス政府に非協力的なクーカー運動の影響をうけ、1907年のパンジャブ農民運動では村で活動し、関係の文献を他の者に読んで聞かせたりしている。<sup>(8)</sup>しかし、彼のアメリカ行きが、つらい農業労働への嫌気と負債の支払い、土地の取戻しのためであつたことは、当時のアメリカ移民の一つの傾向を伝えている。急速にソーハン・シンを変えていったのはアメリカにおける工場労働者としての生活と人種差別の体験であつた。<sup>(9)</sup>

1914年にはいわゆる駒形丸事件がおき、ソーハン・シンの活動もあわたたしくなる。同年3月東南アジアで契約業をしているグルディット・シンは新栄汽船の駒形丸を香港でチャーターし、<sup>(10)</sup>上海、横浜で移民や留学生を加え、総数三百数十名のシク教徒と若干名のパンジャブ人ムスリ

ムの移民希望者をのせて5月下旬にカナダのヴァンクーヴァー港に着いた。しかし、カナダ政府は移民法を適用して彼らの上陸を拒否し、このため船上のインド人は約60日間にわたり法廷闘争の力をも借り、さらには船を取巻く警官隊との衝突を辞さずに上陸をはかったがその目的を達成することができず、イギリスの軍艦レインボーの威嚇と乗客を援助する陸上のインド人達への弾圧のなかでやむなく帰国の途についた。この間、ガダル党は『ガダル』の特別号を発行したほか色々の形で駒形丸のインド人を支援した、ソーハン・シンは駒形丸のあとを追ひ、横浜に先着して駒形丸の乗客にガダル党のプログラムとサンフランシスコ港から運んだ武器を手渡すことに成功したといわれている。<sup>(11)</sup>しかし、カルカッタ近くのバジバジ棧橋で駒形丸を待っていたのはカルカッタ滞在をゆるさぬパンジャブへの強制送還であり、これを拒否したインド人への発砲であった。約20名のインド人はその場で殺害され、200名以上が逮捕されて、グルディット・シンは逃亡した。<sup>(12)</sup>約一週間後にカルカッタに着いたソーハン・シンも船上で逮捕された。

駒形丸船主、塩崎与吉の立志伝を扱った吉田禎男『駒形丸事件』は予期せざる事件に遭遇した日本人の船主や船員の苦しみと安堵、グルディット・シンを中心とするインド人乗客の闘いを感動をこめて描いている。ヴァンクーヴァー港における延々たる争いについての船主の気持を本書は「いづれにも無理からぬところがあり同情すべき点がある。——それだけに其の間の板挟みとなって塩崎氏は苦しむのだ」と表現している。<sup>(13)</sup>また、バジバジ事件後約40日間連日のように参考人として出頭したときの塩崎の感慨は「此の間に塩崎氏が感じた事は「国が強くなくては駄目だ！」といふ事であった。亡国の民の悲哀がしみじみと胸に感じられたといふ」とのべられている。<sup>(14)</sup>これは極限状況を経験するなかでの心情の吐露であったが、第一次世界大戦期は、日本にとってアジアにたいする「同情」を強国をめざす思想へと昇華させる決定的な時期にもあたっていた。

駒形丸事件の発生と第一次世界大戦の勃発は、インドに帰って武装反乱をというガダル党のプログラムの実現を早めた。1914年8月末に第一団がサンフランシスコを出発してのち4千人から7～8千人といわれるガダル党员、その共鳴者達がインドに向っている。ガダル党员を運んだ船のなかで土佐丸の名はよく知られているが、10月末にカルカッタに到着した乗客中の若干名が直ちに逮捕され、多数の者はパンジャブに直送されてそこで逮捕状を示された。

『ガダル党の歴史』の著者パーンチーは、インドにおける武装計画を二つの段階に区切っている。<sup>(15)</sup>第一段階は、ガダル党自身の手による実行の段階で、1914年11月を中心として、ラーホールの駐屯地の騎兵隊の蜂起やフィロズブルの兵器廠の急襲などが計画されながら連絡の不備やきびしい警戒でいづれも未遂に終わった。第二段階では、ベンガルの革命家ラーシュ・ビハーリー・ボースや彼の片腕シャチンドラナート・サンヤールの指導と助力を求めた。このときには、ラーホールのミーヤーンミール駐屯地、フィロズブル駐屯地のほか北インド各地の駐屯地にも使者を送り1915年2月21日、次いで19日に繰上げての武装蜂起を計画したが、ガダル党の中枢部にまで入りこんだ警察のスパイ、クリパール・シンの通報があり革命家達の現場逮捕と一斉非常警戒網によ

ってガダル党の運動は壊滅的な打撃をうけた。

計画を指揮したボースは日本に逃れたが、いわゆるラーホール隠謀事件その他の裁判で絞首刑になった者は42名、終身流刑114名、軍法会議を通じて死刑を宣告・執行された者12名といわれ、逮捕者はおびただしい数となっている。<sup>(16)</sup>これほどの犠牲者をだした運動は稀であり、その裁判と獄中生活はバガット・シン、ラーフルをふくむ多くの青年の気持を揺ぶった。

他方、アメリカに残ったガダル党の指導者にはその後次第にドイツ政府やドイツ在住インド人革命家達からの資金その他の援助がなされるにいたったが、彼らのあいだに初期の熱烈な雰囲気は薄れ、一般党員の指導層にたいする不信感もつのつていった。<sup>(17)</sup>そしてまた、ラーイが非難したのもこの時期のインド人革命家のことであろう。ラーイには彼らからの働きかけがあり、その背後には彼を革命家達の頭に据えようとするドイツの意図もあった。しかし、ラーイは、革命家達との方法の相違、「外国の援助によってえられる自由は浴するに値いしない」という自論と「悲しくもがっかりさせる」革命家達の行動への嫌悪の故にこれを拒絶している。ラーイは、在米のベンガル人革命家達は運動の展開や資金の獲得・支出において無原則で、愛国心が利得追求で染まっているとして M.N. ローイ以外にはあまり敬意を払っていない。<sup>(18)</sup>これに比べれば、教育をうけたパンジャブ人に革命資金の使途において節操があったという。この論評はインド内部の「地域主義」の匂いを感じさせるが、裏切り者とスパイの数ではパンジャブ人もベンガル人に劣らないというラーイの自省は彼の広い視野を裏付けている。

ガダル党の運動には「盲目的情熱」が先行し、十分な組織的準備と時間的余裕を欠き、圧倒的多数のメンバーは「革命戦術」には無縁であった。また、会議派をはじめとするインド内の主な政治勢力が対英戦争協力を打出していたことも運動を孤立化させた。<sup>(19)</sup>

しかし、この運動は会議派にはるかに先がけて自由と平等に基づく共和制、完全独立と世俗主義のプログラムを提示した。党機関紙『ガダル』が最初ウルドゥー語で、次いでパンジャービー、ヒンディー、グジャラーティーなどインドの言語で相互の連帯感と大衆への訴えを強化したこと。党の中央執行委員会や地方委員会の役員選出に選挙制の導入を試みたことも従来のインドの政治勢力にない新しい次元を切拓いている。<sup>(20)</sup>

また、サルデーサーイの指摘するように、ガダル党は当時のいかなる革命組織よりも「大衆的・革命的農民党」に近かった。<sup>(21)</sup>クシュワン・シンらによれば、最初、ガダル党は農村に根拠地を設ける必死の努力をしたが失敗し、結局略奪に頼ったが、その原因は当時農民が革命よりも戦争に関心を抱き、青年達が海外のシク兵士の勇敢な行動にひかれていたことにあるとされている。<sup>(22)</sup>しかし、ガダル党と農民についてのこのような理解は一面的にすぎるであろう。ジャーランドルの DAV スクールに学んだことのあるバンター・シンは自分の村に学校を開き、自治組織（パンチャーヤト）をつくって高等裁判所の判決を覆えす判断を下し、また自分の家をアメリカからの帰国者達の結集する場所とした。<sup>(23)</sup>小規模かつ短期間ではあってもこれは農村拠点化への一つの芽とみることができる。たしかに、カナダ・アメリカ移民のパンジャブにおける社会的基盤は

「中農」層であり、未だ農民問題解決の具体的綱領を用意していなかったが、ガダル党による農村への働きかけは1920年代以降のパンジャブにおける農民運動や社会主義運動の歴史的前提となった。

さらに、運動の対象が次第に農村から軍隊へ移行したにせよ、農民と兵士に働きかけ、とくに兵士がこれに呼応の態度を示したことは、民族解放運動における農民と兵士の結合という課題を提起した。ガダル党運動は、その名の由来である1857年のインド兵の反乱から1946年のインド海軍の反乱への延長上にも位置づけうるのである。

総じて、ガダル党運動は、会議派の動きが停滞しているなかで、ボースのような革命家の手を借りつつも、第一次世界大戦前の要人暗殺のテロリズムから大衆の存在を前提とした武装独立運動や社会主義運動への屈折点を示す運動であったといえよう。

ラーイがアメリカに到着したのは1914年11月であり、翌年前半には「内部からみた民族運動史」である『若きインド』を執筆し、彼の自治への考え方を卒直に語っているが、インドの状況についてラーイなりの柔軟な視角を提供しているのは興味深い。ラーイはインド内に表われつつあるヒンドゥーとムスリムの共同歩調の方向に希望を託し、ムスリム穏健派の態度を評価している。ラーイによれば、ムスリム穏健派はヒンドゥー穏健派ほどみだりにイギリス統治を賛美せず、ムスリム過激派を対政府交渉の切札として活用する熟達した交渉者である。<sup>(24)</sup>これは「過激派」が未だ復帰していない会議派への批判とも受取れる。また、ラーイがナショナリズムの二つの運動、「力、暴力、テロリズムを信ずる」激烈な運動と「理性、正義、良心への訴えに依拠する」運動の結合した力がやがて抗しがたい勢いとなると予測するのも同じような視角からであろう。<sup>(25)</sup>

彼はヒンドゥー「社会改革」者であり、革命家の運動にも批判的であったが、民族的課題のなかで歴史を動かす者としてのムスリムや革命家の役割を認めている。ラーイがつねに正面から批判されつつも、なおかつその否定を通じて彼の思想が継承されていくのはこの辺にその鍵があらう。

しかし、ラーイの大衆観そのものは20世紀初頭と殆ど変らなかった。会議派の失敗の原因を人民との接触の欠如にみ、現在ナショナリズムが知識階級のみならず大衆に浸透しつつある状況を強調しつつも、大衆は無知、文盲、生存競争の故に政治的闘争に心を砕く余裕はなく、基本的問題で迷わされやすいと考えていた。<sup>(26)</sup>かくして、政治的独立の運動は中産階級の指導が大衆に及ぼす影響力にかかってくるとしている。ここに「ブルジョア民族主義者」ラーイの思想を読みとることができるが、彼が第一次世界大戦直後のインドにおける大衆的規模の民族運動の展開に一方でとまどいを感じたのも止むを得ないことであった。

## 二. ラーイと日印関係史

日露戦争における日本の勝利が20世紀初頭のインド民族運動を刺激した要因の一つとしてしばしば挙げられる。実際、プーナーにおいてティラクが司会した集会では日本讃歌が歌われ、日本

の工業発展に讃辞が送られた。ティラク自身、イギリス商品のボイコット運動を指導しながらインド製品に次いで日本製品を保護するよう訴えている。<sup>27)</sup>しかし、それは果して、1915年10月29日付東京日日新聞が「印度人等が英国の覇権を脱して独立国を建設せんと志すに至れるは日露戦争に於ける日本の大勝其因をなす」と述べている意味あいにおいてであろうか。

19世紀後半、ほぼ1870年代以降、インドにおいて世界の独立運動、とくにイタリアの独立とアイルランド問題への関心は深まり、その関心は1920年代、つまり、社会主義思想への関心と重なる時期まで持続している。ことに、マツィーニとガリバルディーがインドの民族主義者、革命家達にあたえた影響ははかり知れず、彼らの描く人物像はときに一面的ではあったが、その対象のなかにみずからの民族的願望を読みこんでいた。すでにふれたラーイのマツィーニ・ガリバルディー伝のほか、インドの代表的作家プレーム・チャンドも1907年にガリバルディーの伝記を書き、ロンドンにあった革命家サーヴァルカルは、1857年の反乱を扱った『インド独立戦争、1857』(1908)に先立ってマツィーニの自伝をマラーティー語に訳している。ガンディーが、1908年、ロンドンから南アフリカへの途次に書いた「近代文明」批判の古典『ヒンドゥー・スワラージーインドの自治』は生涯にわたって彼が変えることのなかった独立論をイタリアに託して提示しているが、多分に当時の革命家達のマツィーニ・ガリバルディー像を意識してのことであろう。ガンディーによれば、ガリバルディーがオーストリアの絆からの自由のみを考えていたのにたいし、マツィーニはすべての人間がいかに自分で統治するかを学ぶべきだと説いており、後者にとってはイタリアは全人民、つまり、農民のイタリアであり、その限りではイタリアは未だ隷属の状態にあるとされた。<sup>28)</sup>

ともあれ、明治以降の日本の歩み、そして日露戦争における日本の勝利へのインドの関心は、たとえ歪められたものであったにせよ——例えば彼らは日露戦争の背景となった中国・朝鮮の像をどのように描いていたか——このような世界的拮据りと歴史的厚みをもつ「遅れた」ヨーロッパとアジアの抵抗にたいする共感のなかで把握されるべきものであった。少なくとも、日本のアジア・ナショナリズム論の枠をこえる視野をもっていたといえよう。

しかし、周知のように、日露戦争の勝利の結果として締結した第二次日英同盟は、日本の朝鮮支配をイギリスに認めさせる一方で条約の適用範囲をインドにまで拡大し、日本はイギリスのインド支配に加担した。この厳然たる歴史的事実はインド人の日本観を徐々につき崩していく。事実、日露戦争後、多数のインド人が日本を訪れたが、イギリスの依頼をうけた日本官憲の行動監視のため「迷惑少からざる」状況であり、「我官憲の英国に対する忠義振りに不安を感じ」てアメリカに去る者が多かった。<sup>29)</sup>1909年に「ヒンドゥスターニーの教授」として来日し、『イスラームの同胞愛』と題する新聞を発行して発禁処分をうけたバルカトゥラーもその一人である。のちに彼はガダル党にムスリムのメンバーを加入させるうえで積極的役割を果し、1915年12月にはドイツの援助をうけてアフガニスタンに成立した「インド臨時政府」の首相となった。<sup>30)</sup>

日本の官憲のみならず、ジャーナリズムもまた日英同盟の制約から自由ではなかった。「過激



派」の弾圧と「穏健派」の無力のうえに成立したハーディング総督（1910—16）下の「印度施政」にふれて「概して治平を享受し、其物質上の繁榮殊に顯著なるものあるに至れり」と評した1915年11月24日付東京朝日新聞の社説の感覚は、近代日本の形成したアジア観と無関係ではないであろう。同社説は、インドの「革命派」と「識見ある人士」を次のように区別している。

「世人動もすれば、印度に於ける英国統治の将来を悲観する傾向あり。成程印度には従来より印度革命派の猛烈なる運動あり、デッカン、ベンガル、パンジヤブ等の地方の印度教徒中には往往狂暴なる印度新聞紙のスワラジュ論に煽動せられ、印度人の支配の下に印度聯邦の成立を夢みるが如きものなきにあらずと雖も、此等の空想は到底実現すべきものにあらず、然れば印度の政客中識見ある人士は、却て極端なる反英運動に与みせず、英国の統治の下に、印度の自治政治を希望し居れり。」

「革命派」を批判しつつもイギリスによる彼らの処刑に際しては批判が同情に転化するという「識見ある人士」ラーイが同年に書いた『若きインド』のなかで示した「識見」の豊かさはここでは理解されていない。<sup>(31)</sup> この年7月に来日したラーイは、日本の政治家、新聞人、学者と接し、大学で講演し、監獄をもみて廻る精力的な活動をし、10月13日には日印協会春秋会有志による歓迎会に出席し「斯の如き会合に似合はしからぬ程の堂々たる」演説においてヨーロッパによるアジア<sup>(32)</sup> 圧迫の悲運の歴史のなかで「独り日本が嶄然とし其国威を顕揚せる」を讃えた。しかしラーイの身辺を日本の官憲につきまといわれ、まもなく身を以てその「識見」を示すことになった。

ラーイは、「1915年のいかなる時点でも教育ある日本人の1%すらもイギリスとの同盟を熱狂的に迎えていたかどうか疑わしく、大抵の有力紙は反英的である」と考えていた。<sup>(33)</sup> しかし、ここに引用した朝日新聞社説の次の部分はイギリスのインド支配の擁護論以外のものではなかった。

「世人動もすれば、従来英国の施政が、印度内多数の人種宗教の差異を利用して、之を反目せしめ、以て英国の地位を鞏固ならしめんと力むと称するも、是事實にあらず、却て英人は此等民族間の紛争を防止する方針の下に其治平を保持し得たり。」

さきの演説で、ラーイは日本の新聞社が記者中より特にインド研究を専門とする者を選んでインドの現状を調査することが日印相互理解のために望ましいとのべている。日英同盟を通じてインドをみる日本にたいする「新聞人」ラーイの適切かつ具体的な提言であった。

これよりさき、第一次世界大戦の勃発を契機にドイツ政府とヨーロッパ亡命中のインド人革命家との連携がはじまった。ヴィレンドラナート・チャトパドヤールが『日本——アジアの敵』を著したのはこのような時期である。

一方、日英同盟下の日本は、第一次世界大戦期にインドの独立運動を規制する二つの象徴的な対応策を採った。

すでにふれたガダル党の革命家達はインドへの途上シンガポールのインド人兵士達にも働きかけたが、1915年2月15日、第5軽歩兵聯隊に所属しアレクサンダー兵營に駐屯するインド人ムスリム兵士が反乱をおこした。反乱者の一部はタングリン兵營内に収容されていた約300名のド

イッ人船員および市民を釈放し、彼らに武器を渡そうとして拒否されている。<sup>34</sup>ここにも当時のインドの革命家達のドイツに抱く期待をみることができる。反乱鎮圧後日本のシンガポール駐在、藤井領事の作成した『在新嘉坡印度兵暴動事件報告』は反乱の原因を次のように見ている。<sup>35</sup>

「要之暴動ノ真因ハ……回教徒タル印度人カ宗教上ノ関係(イスラーム世界の指導者トルコがイギリスと戦っていたことを指す)ニ於テ独逸人ノ煽動ニ応シテ遂ニ最後ノ決心ヲナシタルモノナルヘク其ノ以前印度人側ニモ幾分英国ニ反抗セントスル意志ナキニアラサリシモノナルヘシ」

反乱についてのこの解釈は、現在のインド側の研究よりもはるかにドイツ人捕虜の積極的役割を推測しているが、いずれにせよ、この反乱に示した日本の態度は、日本とインド・ナショナリズムの昂揚を関係づける論理を払拭するにふさわしいものであった。反乱がおこるやまず、イギリス人総督の依頼で日本人 186 名の義勇兵が組織されて市街の警備にあたり、また、ジェーラム司令官の要請で、シンガポール入港予定の軍艦、音羽とすでに出港していた対馬がそれぞれ17日と19日に接岸し、総数 160 名の陸戦隊を上陸させた。音羽の陸戦隊がイギリス兵と協力し、「暴徒の本拠」アレクサンダー兵営を占領したほか、日本軍は約20名のインド兵を投降させた。

日本側の努めてとろうとした「消極的」態度にもかかわらず、それがインド人兵士の眼にどのように映ったかは、報告書の二段の文章を順序を逆にして読むとき鮮明となる。<sup>36</sup>

「我海軍陸戦隊ニ対シテモ動モスレハ最モ危険ナル配置ニ就カンコトヲ希望セシ由ナルモ我指揮官ハ其ノ都度体良ク之ヲ峻拒シタル趣ナリ」

「土屋司令官ハ陸戦隊員ニ対シテ注意ヲ与ヘ印度兵ニ対シテハ吾人何等ノ遺恨アルニアラサルニ付当方ヨリ好テ彼等ヲ殺傷セス可成投降セシムルノ手段を取ルヘキ様内訓シタル由ナルカ幸ニシテ彼我共に殺傷ナク暴徒約二十名ハ安心シテ我軍に投降シタルモ英国兵ニ引渡サルルニ及ンテ投降者ハ一齊ニ意外ノ感ニ打タレ同時ニ英兵ニ対シ嫌悪ノ態度アリシト云フ」(傍点引用者)

日本軍がイギリスの要請のもとでロシア、フランスの艦船とともにインド兵の反乱の鎮圧に参加したことは、客観的には義和団事件のインド版に等しいものがあつた。37名から40名といわれるインド人が公開の場で見せしめの死刑に処せられたが、その後の日英同盟の解消によって償いえない日印関係史の汚点がここに刻まれたといえよう。

この反乱のおこった1915年には、日印関係史の画期をなすもう一つの事件がおこった。すなわち、11月末、「印度革命党员」タクール(ラーシュ・ビハーリー・ボースの偽名)とグプター(ヘランバラール・グプター)両氏にたいする12月2日を期限とする日本からの退却命令がだされたことである。当日までに彼らの希望するアメリカ行きの船が出ない以上、香港または上海でイギリス官憲に身柄を引渡し極刑に処することを認めるにひとしい日本政府の処置であつた。

このとき、ボースは「由来私は日本の如き東洋の先覚者に頗る多分の期待を持って居た」が今度の退却命令を致仕方なしとし、「民衆の同情に深く感動」しながらも「此度日本政府の手に依つて私共に与へられた取扱は向後三億の印度人が日本に対する心持に頗る重大な影響を及ぼすものであるといふ一事を此際日本国民は承知してゐて頂きたい」と語っている。<sup>37</sup>また、東京日日新聞

は一インド人の憤慨を「日本政府のお方が印度人唯二人を処分した許りで事は済むと思ふ様であつたら大間違です；二人の背後には三億人の印度国民があります」(読点は引用者)と記している<sup>(38)</sup>。

当時日本にあったラーイも知人の安倍磯雄らに会って助力を求めているが、12月1日付の読売新聞に掲載された「余は両氏とは政治上の立場を異にし又平素親交ある者にも非ざれども」ではじまる『某印度名士談』は同紙のそれ以前の記事から推してラーイの談話である可能性が濃い。この発言は、シンガポールにおけるインド人兵士の反乱への日本海軍の関与を「甚だ遺憾」とし、それに加えて今回の事件を知ればインド人の対日反感は一層つるると予測し、英仏両国の例を引いて二人が仮にドイツのスパイであるという何らかの事実を発見した場合でも抱禁・監視で十分であるとし、日本政府のとった処置を国際法と人道に反したものであると抗議している。ラーイの日本観が大きく修正を迫られたことだけはたしかである。

この退去命令はひろく日本の世論に「進んだ」ヨーロッパの論理をはなれてインドをとらえなおすことを迫り、政党や新聞人、一般の人々を動かした。強制執行の前夜、頭山満らの労で二人のインド人は地下生活に入り、その後グプターのみがアメリカに去っている。読売新聞は、12月4日付の論説で「古来当局横暴を極め国民訴ふるに処なき」に際しての国民に代っての「形而上の勢力」の活動、一種の「神隠し」として二人の突然の「消失」を解釈し「邦人の信義と任侠の精神が依然として健全せるの立証」を喜んだ。論説は、「邦人の義気」を自讃しつつも、「印度人の去就は小問題なり」としている点、その重点はインド・ナショナリズムの理解を深めることよりも日本ナショナリズムの「精粹」を確認することにあった。

ラーイは、12月11日に横浜を離れサンフランシスコに向った。この事件のまえに乗船を予約済であったとしているが、日英同盟が彼の日本滞在の延長に不安感をあたえていたことも隠していない。11日付の東京日日新聞も『印度人ライ氏渡米』と題して次のような小さな記事をのせていた。

「……氏の本邦に来るや印度人は氏を遇する事鄭重を極めたるより我警視庁にては氏を印度革命党の首領と誤信し絶へず刑事を附し居たれば氏は之を不快として急遽本邦を引揚ぐる事となれりと言ふ。」

かくして、シンガポール反乱の鎮圧とインド人革命家退去命令事件をはさむ1915年は、日露戦争論でインド民衆を動かすことのできなくなった事実を最終的に告げるものであった。我々は、日露戦争における日本の勝利がいかにインドの民族主義者達に影響を与えたかということにとどめることなく、その影響をうけた彼らがその後の歴史のなかでいかに20世紀初頭の国際的認識のあり方を変えていったかをこそ問題とすべきであろう。

1917年のロシア革命と1918年のドイツの敗戦を機として彼らの関心はロシアに移っていく。インドの歴史家パニッカルは、日本と他のアジア地域のロシア革命にたいする受けとめ方の相違を指摘して、「西洋にたいするアジアのいかなる革命も民族独立のみを目指すべきであり、社会の急進的<sup>(39)</sup>革命を目指すべきではない」というのが日本の利益にかなうことであつたとのべている。以

後、このような日本からアジアもまた離れていったのである。第二次世界大戦期におけるラーシュ・ビハリー・ボース、のちにはスパーシュ・チャンドラ・ボースを前面に立てての日本によるインド国民軍への「支援」は、第一次世界大戦以降のこの新しい文脈のなかでとらえられるべきである。

1920年2月、6年ぶりにボンベイでインドの土を踏んだラーイは、歓迎会に臨んで、ポリティッシェンは英米仏日にまかせようとのべ、日本を世界の「進んだ」諸国の列に加えた。

「我々はポリティッシェンは欲しくない。飾らずに真実を語る人間が欲しい。……地球上で英米仏日がもっとも自由な国々と思うかもしれない。ある点ではたしかにそうだ。しかし、他の点では彼らはもっとも隷属せる国民なのだ。彼らの殆どは真実を語るができない。彼らの殆どが高遠な主張のための献身の精神をもっていないのだ。」<sup>(40)</sup>

ガンディーのインド民族運動の舞台への登場を二重写しにしたこの演説は、日本を特に選んで論じたものでないだけに、かえって日本についての真実の気持を伝えている。

この年、インド労働者の全国組織、全インド労働組合会議（AITUC）が結成され ラーイはその初代議長をつとめた。そして、1926年のILO 第八回総会には彼はインドの労働者側代表として出席している。第一次世界大戦後のILO については「先進帝国主義国における労資関係安定体制の国際的機構化」<sup>(41)</sup>としてとらえることもできるであろうし、「ブルジョア民族主義者」ラーイがインドの労働者を代表する資格について疑問を呈することもできよう。しかし、ラーイによれば、東洋及び有色のアフリカ・アメリカ世界を代表して参加しているのはインドと日本だけであった。ラーイは、総会の演説で、日本が1919年のワシントン条約に批准しないために、インドの労働者は婦人の地下労働の禁止など彼らの要求を提出するのに困難を感じているとのべた。何故なら「もっとも進んだアジアの国が古い状態になお固執しているからである。」そしてさらにラーイは産業の利益よりもヒューマニティーの利益のためとして次のように日本に訴えた。

「日本は東洋の名誉を擁護できるアジアの唯一の進んだ国である。私は日本にこの点で他国に遅れず、自己の産業から金をつくりだそうとするあまりに自分自身の理想を忘れてはいないということを示すよう訴える。」<sup>(42)</sup>

こうした事態のもとで、日本の国際労働協会の1926年総会は「ワシントン夜業禁止条約案」の批准・実施を政府に求めていた。<sup>(43)</sup>雇用者側代表も出席するILO 総会の「一波瀾」<sup>(44)</sup>には、もちろんインド市場をめぐる日印英資本の三どもえの争いも影を落していたであろう。しかし、ラーイの発言を、「先進」ILO 体制の「後進」アジアへの浸透のための提言としてでなく、日本を理解するインド人による日本への痛切な叫びとして聞きとることも必要であろう。<sup>(45)</sup>日本がアジアでもっとも「進んで」いるが故にインドの労働者の足かせになっているというラーイの指摘は、日露戦争論でもはや打消すことのできない重みをもっている。インドの民衆は、この段階ですでに、インド独立「支援」のかけ声においてでなく、みずからの日常的現実において日本とアジアとのかわりの真の姿を見抜く素材をもっていたのである。

### 三. 民族自決論

1919年に、ラーイはニューヨークで『インドの政治的将来』を著わし、インドへの漸進的自治の付与を約束したインド相モンタギューの声明(1917)、ロシア革命、ウイルソンの民族自決論という一連の歴史的状況のなかで、インドの自治の問題を具体的にかつ将来への展望を加えて分析している。そこでは、「声明の精神が実行に移されるならば建設的な考えで積極的に協力することが我々の義務である」という「建設と協力の精神」で州段階での部分的「自治」を約束したモンタギュー・チェルムズフォード報告(1918)が検討されている。

完全独立の理想に直ちに到達できないとするラーイの提案は現実的である。「陸軍将校が主としてインド人によって占められ、帝国海軍を補完するためにインド海軍が樹立されるまで」は統帥権の移譲を要求しないとのべているが、<sup>(46)</sup> 実質的な財政上の自治は直ちにインド人の手に返還することを求めているからである。

しかし、現実のイギリス側の報告書はこの現実的なラーイの提案に程遠かった。ラーイによれば、現在のインド政府は英印双方の資本家・地主の政府であり、今度の改革案ではイギリスの権力が削られ、インドのそれが増大するかもしれないが、税を払うインド大衆には殆ど何も残っていない。

ラーイの分析の当否はともかくこのような表現からも彼がアメリカ滞在中に社会主義思想と接触していたことがうかがわれる。アメリカでラーイと会い、彼の演説会からの帰路に逮捕されたことのあるローイは、アメリカ人の急進派のあいだに共通の友人をもつ二人がマルクス主義に反対するためにマルクス主義を読みはじめたと回顧している。アメリカ参戦前のある集会で演説したラーイは、インドの大衆の貧しさを訴え、彼らを収奪するイギリス人を攻撃した。そのとき、「社会主義者」のアメリカ人のあいだから「民族主義者」はインドの大衆の貧困を終らせるためにいかなる提案をしたのか、そして外国の帝国主義に代って国内の資本家に搾取されるならば大衆にとっていかなる差異があるのかという「挑発的」質問がだされ、ラーイは憤然として「兄弟に蹴られるのと外国人の泥棒に蹴られるのとは大きな相違だ」と反迫している。ラーイと怒りを分かちながらも新しい光のひらめきを感じたローイはそれ以後「国際主義」に徹することになるが、このラーイの怒りには「ブルジョア民族主義者」であることをついに離れなかった彼の「限界」とともに植民地支配による民族的抑圧の質が伝わらないことへの口惜しさがひそんでいた。<sup>(47)</sup>

資本家・地主の権力を強め、消えいく産業文明の悪弊をインドに持ちこむ計画には反対であるとするラーイはいわば「非資本主義発展の道」を求めている。

「若干の思想家——そのなかにはマルクスもいるが——の判断によれば、一つの国はプロレタリアートが支配するまえに資本主義の工場を通らなければならないという。そのことを知らぬわけではない。我々はこの理論が真実とは思わないが、たとえ真実であるとしてもその証明を意識的に助けることはしない。」<sup>(48)</sup>

ラーイは決して社会主義者ではなかった。しかし、イギリス植民地支配のもとに生き、貧富の差

や黒人問題をかかえるアメリカ資本主義の矛盾をまのあたりにみつめる彼には、「階級闘争の悪弊を回避したい」とする「自由・平等・機会均等」への欲求があり、そしてこの視角はロシア革命にたいする素朴な受けとめ方を可能にした。

「それ（ロシア革命）は新しい崇高な国際主義に燃えた新しい社会秩序をうみだした。この国際主義はその基礎に人種・宗教・信条あるいは皮膚の色にかかわらずすべての人民にたいする正義と自決権を認めているにちがいない。」<sup>(49)</sup>

ラーイはロシア革命を人民の自決の問題としてとらえ、「ボルシェヴィズムに対応する唯一の道は現在搾取されている地球上のそれぞれの人民に権利を認めることである」とした。彼の思想は1920年代にヒンドゥー・コミュニズムに染まったといわれている。しかし、ラーイの自決論の基本的視角が変らなかったことは、そのイスラーム論によって明らかであろう。1919年の段階でイスラーム世界をみる次のような視点は、1928年のラーイの怒りの書『不幸なインド』にもそのまま生かされている。

「イスラームは死んではない。死ぬこともありえないし、死のうともしないであろう。イスラームを調和と平和の勢力にする唯一の道はその潜在力を認め、感受性を尊重することである。イスラーム諸国の独立がこうした状態への基盤となる。」<sup>(50)</sup>

第一次世界大戦直後のラーイにおける当面のインド自治の目標は「穏健派」に近いものがあった。しかし、ラーイの場合、イギリスにたいする態度が「協力」的であっただけにかえってそれを満たしえないイギリスにたいする忿懣も抑え難かった。それは、彼が自治の問題を国際的な民族自決の流れのなかでとらえる視野をもっていたからであろう。1880年代初めにおけるラーイのマツイーニにたいする感動は、1910年代末のロシア革命にたいする素朴な期待と重ね合わさったが、ラーイの歩みはそのまま近代インドの国際的認識の成長の歩みに他ならない。

第一次世界大戦中、インドの完全独立を「急がない」ラーイはドイツの援助には期待していなかった。他方、インド人労働者の汗によって支えられたといわれる初期のガダル党運動を除いて大戦期の在外インド人の革命運動は、資金、武器調達、計画実施のうえでドイツの強力な支援を望んでいた。ドイツ政府との対等性を主張するためにインド独立後に援助の「返済」を約束する者もあったが、そのかわり方が一つの問題を投げかけていることは否定できない。ドイツの敗戦を契機にインド人革命家達の期待はドイツを離れソ連に移っていくが、かってラーイによって批判された彼らは「ブルジョア民族主義者」ラーイの自決論をこえるどのような論理を新しい国際的環境のなかで見出しえたか、それが1920年代のインド史の大きな課題の一つであった。

(続)

〈註〉

まえがき

- (1) 石田保昭『インド現代史』1968年, 286頁.
- (2) 近藤 治「インド資本主義形成の特質」(中村平治編『インド現代史の展望』1972年, 12頁).
- (3) Sitaramayya, B.P., The History of the Indian National Congress, Vol. 1 (1885-1935), Bombay, 1946, pp.102-3.
- (4) ラーイと「社会改革」運動についての一つの視点を提示したものとしては, 荒松雄『現代インドの社会と政治——その歴史的考察』1958年, 77-78頁.

第1章 「社会改革」の思想

- (1) Joshi, V.C. (ed.), Lajpat Rai- Autobiographical Writings (以下Ⅰと略); Delhi, 1965, p.47. ラーイの20世紀初頭までの歩みについては本書に多くを負っている。
- (2) Yashpal, Sinhalokan, Bhag 1, Laknau, 1964, pp. 26-27.
- (3) Ⅰ, p.42 and p.47.
- (4) Ibid., p.57.
- (5) Tandon, P., Punjabi Century 1857-1947, London, 1961, p.33.
- (6) Rai, L.L., The Arya Samaj (以下Ⅱと略), London, 1915, xxiv.
- (7) Ibid., p.193.
- (8) Rai, L.L., Young India (以下Ⅲと略), London, 1917, pp.78-90.
- (9) Ⅰ, pp.87-88.
- (10) Ibid., p.95.
- (11) Ⅱ, p.272.
- (12) Yashpal, op.cit., p.45.
- (13) Ⅱ, p.150.
- (14) Yashpal, op.cit., p.28.
- (15) Ⅱ, p.283.
- (16) Chaturvedi, B. (ed.), Atmakatha-Ramprasad 'Bismil', Dilli, 1966, p.23.
- (17) Rahul Sankrityayana, Meri Jivan-Yatra, Bhag 1, Calcutta, 1951, pp.225-27 and p.247.

第2章 「過激派」のナショナリズム

- (1) Joshi, V.C. (ed.), Lala Lajpat Rai- Writings and Speeches, Vol. 1 (1888-1919), Delhi, 1966, p.100.
- (2) Chintamani, C.Y., Indian Politics since the Mutiny, Allahabad, 1937, p.119.
- (3) Joshi, op.cit., Introduction, xxxvii-xxxviii.
- (4) Ⅱ, p.222.
- (5) Ibid., pp.231-2.
- (6) Wasti, S.R., Lord Minto and the Indian Nationalist Movement 1905 to 1910, Oxford, 1964, pp.94-95.
- (7) Ibid., p.94.
- (8) Josh, S.S., Baba Sohan Singh Bhakna, New Delhi, 1970, p.10.
- (9) Reisner, I.M. and Goldberg, N.M. (ed.), Tilak and the Struggle for Indian Freedom, New Delhi, 1966, p.642.
- (10) Ⅰ, p.224 and p.226.
- (11) Reisner and Goldberg, op.cit., p.644.
- (12) Ⅰ, p.225.
- (13) Ibid., pp.7-8.

第3章 ラーイの国際的認識

- (1) この時期に, アグネス・スメドレーはラーイの秘書をしていたことがある。
- (2) Adhikari, G., Forward, in: Josh, op.cit., viii.
- (3) Panchhi P.S., Gadar Parti ka Itihas, Dilli, 1961, p.1.
- (4) Singh, Khushwant and Singh, Satindra, Ghadar 1915, New Delhi, 1966, p.10 and p.13.
- (5) Dharmavir, Lala Hardayal, Dilli, 1970, p.76f.

- (6) Singh,K. and Singh,S., op.cit., p.17.
- (7) Panchhi, op.cit., p.62 and pp.81-83.
- (8) Josh, op.cit., p.11.
- (9) Ibid., p.8 and p.11.
- (10) インド側資料は、一般にインド人乗船者数を3百名台にしているが、吉田禎男『駒形丸事件』昭和35年は6百余名としている。  
       なお、神戸大学文学部図書館所蔵の本書の所在、利用について、中村平治、栗原 優両氏の御世話になった。
- (11) Josh, op.cit., p.40.
- (12) 吉田氏は死者数を286名としている。吉田、前掲書、250-1頁。
- (13) 同書 161頁。
- (14) 同書 254-55頁。
- (15) Panchhi, op.cit., p.107f.
- (16) Singh,K. and Singh,S., op.cit., p.45.
- (17) Ibid., pp.51-52.
- (18) I, p.208.
- (19) Panchhi, op.cit., pp.164-67.
- (20) Ibid., p.77.
- (21) Sardesai,S.G., India and the Russian Revolution, New Delhi, 1967, p.33.
- (22) Singh,K. and Singh,S., op.cit., p.56.
- (23) Panchhi, op.cit., pp.189-90.
- (24) III, p.188.
- (25) Ibid., lxxv.
- (26) Ibid., p.31.
- (27) Gopal,R., Lokamanya Tilak, Bombay, 1956, pp.233-34.  
       ベンガルでは日本製品も「スワデーシー」(国産)として扱われたことがあるという。(Ahmad,M. Myself and the Communist Party of India 1920-1929, Calcutta, 1970, pp.9-10.)
- (28) Gandhi,M., Hind Swaraj or Indian Home Rule, Madras, n.d., pp.63-64.
- (29) 東京日日新聞、大正4年10月30日。
- (30) Majumdar,R.C., History of the Freedom Movement in India, Vol. 2, Calcutta,1963, p.397.
- (31) III, p.194.
- (32) 東京朝日新聞、大正4年10月15日。
- (33) I, p.210.
- (34) Panchhi, op.cit., p.162.
- (35) 外務省『日本外交文書』大正4年3冊下、昭和44年、1198頁。  
       ただし、反乱の数日前に兵士達に働きかけたバルマーナンドは、ムスリム兵士のみの反乱説には異議をとなえているかにみえる。(Parmanand, Do Shabda, in: Panchhi. op.cit.)
- (36) 前掲『日本外交文書』1201-2頁。
- (37) 東京朝日新聞、大正4年11月30日。
- (38) 東京日日新聞、大正4年11月30日。
- (39) Panikkar,K.M., Asia and Western Dominance, London,1959,p.193.
- (40) Rai,L.L., India's Will to Freedom, Madras, 1921, pp.89-90.
- (41) 安田浩「政党政治体制下の労働政策——原内閣期における労働組合公認問題——」『歴史学研究』1975年5月号、28頁。
- (42) Joshi,V.C. (ed.), Lala Lajpat Rai-Writings and Speeches, Vol. 2 (1920-28), Delhi, 1966, p.313.
- (43) 大原社会問題研究所編『日本労働年鑑』昭和2年版、昭和43年、407-8頁。
- (44) 同書、489頁。
- (45) 1930年代の日本資本主義論争における「印度以下の労働賃銀」論が、ラーイの提起に答えるどのようなインド労働者像を用意していたかが、ここで問題となろう。
- (46) Rai,L.L., The Political Future of India (以下IVと略), New York, 1919, p.61.
- (47) M.N.Roy's Momoirs, Bombay, 1964, pp.28-29. 大戦期にドイツの援助に期待して奔走したローイは、そ



の計画が未遂のまま、来日しているが、ラーシュ・ビハーリー・ボースの日本への期待には疑問をもち、孫文との接触にもとづく中国行きもローイの念願を満たすにはいたらなかった (ibid.,pp3-13). その後、渡米した彼は、ラーイをも親ドイツ派に数えている (ibid.,p.26).

ラーイのこのアメリカ社会主義者観は、スメドレーにも共通する面をもっている (アグネス・スメドレー著、尾崎秀実訳『女一人大地を行く』(角川文庫) 下巻、昭和33年、194-5頁).

(48) IV, p.202.

(49) Ibid., pp.205-6.

(50) Ibid., pp.207-8.

\* ラーイの主要著作は、大阪外国語大学図書館および国会図書館所蔵のものを利用した。

(1975. 8. 29)